
大好きッ

+綾奈+

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大好きッ

【Nコード】

N5986H

【作者名】

* + 綾奈 + *

【あらすじ】

誕生日も同じ、歳もいっしょ、家は隣。幼稚園も小学校も同じだし、中学も一緒。そして、違うクラスになったことすら無い。…
僕等の運命…

運命

僕等は出会って14年目を、今日迎えた。

13年目の誕生日。

『おめでとう 陸！』

『あッ、おめでとう、みい』

こんな軽い言葉で、お祝いをした。

おさななじみ幼馴染だった僕等は、生まれたその日からの友達。

誕生日も同じ、生まれた病院も同じ、幼稚園も小学校も同じ。

そして今は…中学も同じ。

運命のような出会いと、全てが同じ奇跡。

ありおかりくと有岡陸斗…あやせ みう綾瀬美雨。

僕等はいつも一緒。

私達二人は、クラスだって違ったことがない。

偶然にしても出来すぎだと思っていた。

でもこれが運命ならどうかなあ？

いつもそう思っている。

『みいッ！！大丈夫？』

あたしが転んだときに、いつも走って駆けつけてくる陸斗を見て、わたしはなんとなく嬉しかった。

全部わたしのためにやってくれて、泣くのも笑うのもいつも一緒に。

陸斗は、わたしのとって家族と同じぐらい大切。

もしかしたら、家族以上に大切かもしれない。

「ねえ陸…？」

台所に立ちながら、美雨は焼き上がったホットケーキを抱えていた。

陸斗は何も言わずに、美雨が抱えたお皿を机の上まで運んだ。

「旨そう…：みい、ありがと。一緒に食べようよッ」

手招きをする陸の優しさにはいつも驚く。

「うんッ」

料理が得意な美雨の横顔を、俺はいつも追っている。

好きとか嫌いとか、そんな感情が無くて、あっても。俺はいつも一緒にいられる時間が楽しくて嬉しい。

「ねえ陸？今回は失敗しちゃったんだあ〜 おいしいかなあ？」

家族として見た台詞^{せじふい}。

友達以上だけど、恋人未満のわたし達。

陸斗が好き、そう思っているのもわたしだけ？

今年^{ことし}は告白…挑戦してみようかなあ。

美雨はそんなことを考えながら頬を赤らめていた。

ここまで気の合う僕等は、そうはいないと俺は思っている。

今まで、違ったことがほとんど無い。

そういえば、ケンカすらしたことなかったっけ。

「絶対うまいから大丈夫！」

陸斗は笑顔でそう言った。

美雨は、そんな陸斗を見て嬉しそうに頬を赤らめて照れた。

しばらくはくだらない話ばかりで盛り上がった美雨は、帰宅時間が迫っていた。

「あッ、美雨もう帰らないとだ」

「じゃあ俺送るよ…」

美雨の帰り支度が終わるまで、陸斗は玄関で待っていた。

家は隣で、1分もかからず帰れる距離だった。

それでも陸斗は、何も言わずに送ってくれていたのだ。

「陸ッ！お待てせえ」 ねえねえ、今日は家帰らないで公園行かない？」

「おうっ」

まだ肌寒い2月の夜。

陸斗が温かいホットミルクを買ってきてくれた。

たわいも無い会話をしながら公園のブランコを揺らした。

時間も遅くなり、家から遠すぎる公園。

遠い帰り道を進んだ。

「ねえ陸？美雨たちが生まれて14年になるよ…明日はうち等の誕生日だから」

「だな。でも、俺は知らないフリしとく…。その方がなんか良いことありそうじゃん？」

・・・2月14日・・・

僕等が生まれ、その日のうちに出会い、幼馴染として生活する運命の日。

君は運命を信じますか…？

俺は信じる。

信じないなんて言ったら、俺等が出会った意味すらなくなっちゃうと思うから。

公園からの帰り道。

暗く車の通りが多い地域。

「ねえ陸：今日ね、何か嫌な予感がするの。すごく、こっから動いちゃいけないような気がする」

美雨はそう言いながら陸を見た。

「でも、帰らないとだろ？動かなきゃいけねえだろ…」

陸斗は戸惑いながらそう告げた。

美雨のカンはよく当たる。そう知っていたから、陸斗は何か嫌な感じがしていた。

再び歩き出した美雨と陸斗は、また会話で時間を紛らわすように心がけていた。

「ねえ、陸って好きな人いないの？」

星を見上げながら、美雨は照れくさそうに聞いた。

「えっ？秘密…みいは？」

「あっ！美雨はねえ」

言いかけの言葉。

答えはこれから。

予感

言いかけた言葉。
今はまだ秘密。

「14年目え〜 陸うツ！おめでとあ〜」
2月14日。バレンタインと同時に、2人の誕生日でもあるこの日。

「おめでとつ…」
愛想ない陸のお祝いの言葉と、いつもどつりの明るい美雨の言葉。去年と同じような誕生日を迎えた。

「今日が学校休みでよかつたよねえ〜」
はしゃぐ美雨のお目当ては、休日にもかかわらず、誕生日プレゼントを届けてくれる友達。

「まあな。でも誕プレ目的にはしゃいでるだけだろうけど…」
「当たってるんだけどお…あつ！ねえ、これえ〜」
照れながら、後ろでガサゴソと何かを取り出して来た。

「陸に誕生日プレゼントでえす」
ヒョイツと差し出す美雨からプレゼントを受け取り、笑みを浮かべて言った。

「あんがと。みい、ちょっと待ってて？」
そういつて陸斗は、美雨の家を飛び出して行った。

「どおしたんだらあ…」
しばらくして、何かを手にしながら陸斗が戻って来た。
「みい、これツ！おめでと」
チエツクの包装にピンクのリボンが上手く飾られていた。

「綺麗だねえ〜…ねえツ！今日公園いこ？そこでこれ開きたいんだあ〜」

「うん」

美雨は嬉しそうにプレゼントを抱きしめた。

美雨と陸斗はゆっくりと公園までの道のりを歩いていた。

「みい、どうした？」

キョロキョロと周りを見渡す美雨を見ながら、陸斗は首をかしげた。

「何か…嫌な予感がするの。とっても、悲しいことがこれから起こると思う。それに…その嫌な事ね、今日起こるよ。もう少し……」

美雨の予想や、予感。

実は今まで、はずれたことが無い。

全部的中していて、しかも美雨が言ったとおりのことが起きる。

「怖い…?」

前を見ながら、美雨はゆっくりと答えた。

「ううん。そんなことはないんだけど、何か嫌だなんて思って」

そんな話をしながら、しばらくは何も話さずに歩いた。

脇腹に抱えたプレゼントを握り締めて。

「陸う」

やっこのことで明るく笑顔を作り上げていた。

……ガシャアンッ!……

大きな音。

何が起こったのかは、美雨も陸斗もわからずにいた。

美雨は言いかけた言葉を残して…。

旅立ち

『陸うっつ!』

どこからか、美雨の音が響いた。

「み…い」

体は重く、目が開かない。

呼吸が荒く、白いベットの上に横になっただま。

「み…い」

陸斗は懸命に美雨を呼んでいた。

でも聞こえたのは、機械の音と誰かのすすり泣く声だけ。

「陸…斗…?」

「母さん…?」

やっと目が開き、見えたものは…陸斗の親と、美雨の親。

何人かの友達だけだった。

「何が…あつたんだ…よ…」

友達が何人か、声をそろえて答えようとしていた。

「事故……」

悲しそうな顔をして、泣きながら陸斗の横を指で示した。

けれどそこにいたのは美雨ではない…。

美雨な分けがない。

信じたくない。

変わり果てた姿。

血まみれで、ぐったりとしている。

「みい…死んでないよな…死ぬわけないよなあっ!」

美雨の横には、さらに誰かが寝ていた。

「何で…神野^{かみの}までいるんだ…」

…数時間前…

陸斗と美雨は楽しそうに話していた。
歩きながら、笑顔で溢れていた。

『あッ、美雨ちゃんと陸斗くん』

凜は、美雨と陸斗を見つけて声をかけた。

『あつ、待って…美雨ちゃん後ろっ！』

凜は叫んでいたけれど、遠くにいる美雨たちにその声は聞こえていなかった。

凜は歯を食いしばって駆け出した。

『あつ！ねえ陸斗くん、美雨ちゃんっ！』

凜は足が速く、美雨と陸斗が車に跳ねられる直前に、車の前で美雨たちの肩を押した。

『キヤーツ！！』

三人の悲鳴が響いた時、凜は間に合わず事故に巻き込まれていた。

「神野さん…陸斗くんたちを助けようとしたみたいなの。でも、

神野さんって声が小さいから…届かなかったと思う……」

病院に響く機械の音は、次第にピーと鳴り続けた。

その音は死のサイン。

「ちよつとっ！神野さんがあゝ…うっ、やだあゝ！戻って来てよ

お

涙すら流れなくなるほどの衝撃。

言葉を失うほど悲しい悲劇。

「うっ…うっ…やっ…神野さあん」

そしてもうヒトツ。

……ピー……

機械は凜の後を追うように鳴った。

美雨はもう呼吸すらしていなかった。

「み…い…?」

寂しく病室に響く音はもう鳴り止まない。

「2月14日11時59分…神野様と綾瀬様が天国へ行かれまし
た」

美雨は、この日が何の日なのかわかって旅立ったのか…。

誕生日の夜。

日付の変わる寸前の59分に、美雨は届かない所まで飛び立った。
儂く優しい命の灯火が消えた。

「み…い……」

陸斗の目には、透明な雫が光った。

美雨のために流した涙なのか…？

戸惑いと困惑。

陸斗はもう一度眠りについた。

何も言わずに、ただ美雨と凜の傍にという思いだけで。

「あッ陸う」

まだ生きてるじゃないか…。

「みい、速く行こう…？みんなが待つてる」

陸斗は、目の前にいる美雨に手を差し伸べていた。

「駄目だよ、陸斗くん…。あたしも美雨ちゃんも、もう戻れない。

ほら、泣いてるでしょ…？あたしはあそこにいる…でも、あたしの
魂はここにある。美雨ちゃんとあたしは死んじゃったから…」

凜は自分の体を見つめていた。

静かに苦笑いをしながら、何にも触れることが出来ない手を見つ
めて。

頬を伝う涙を、ただ静かに待った。

「陸斗くん…助けようとしたのに、美雨ちゃんを連れてきちゃっ
てごめんなさい…陸斗くんだけでも助かって…よかった。元気

でね…」

凜はそういいながら、何も状況をつかめていない美雨の手を引っ張った。

旅立ちの色が、美雨と凜を包んでいる。

美雨と凜の進む先にある扉を見つめながら、陸斗はもう一度泣いていた。

……ピー……

陸斗の命も、儚く消えようとしていた。

美雨を失い、クラスメイトも失った悲しみが強すぎて、陸斗の体が生きることを拒否していたのだ。

(美雨…もう少しでそっちにいくから……)

陸斗の死にかけた体には、ゆっくりと涙が伝っていった。

「先生ツ！陸斗があ……」

病院にいたクラスメイトも親も学校の先生も。

ただ泣くことしか出来なかった。

信じて、祈るだけ。

なんて安っぽい行為なんだろうか。

そんなことで命がひとつ助かれば、誰だって同じことをするのに…。

でも、それでも助かって欲しいから…。

異世界

青い空。

アイス・ブルーに輝く海。

「すご〜い」

青すぎる世界に目を見張り、真っ白なものに目を光らせた。まるで、初めて空を見上げたように…。

初めて海を眺めたように…。

「美雨ちゃん…ここがどこか、もうわかるはずでしょう？」

信じたくはないけれど、美雨はちゃんと理解していた。

何にも触れることの出来ない手。

鏡に映らない美雨の姿。

暖かさを感じられない体。

何も言わなくてもわかってる。

わたし自身が幽霊というものになってしまったことを…。

「信じたくないの…。もう、陸に会えなくなってしまったこと。

ずっと好きだったのに、なんで…？なんで凜ちゃんはわたし達を助けようとしたの？あたしは……」

霊界で初めて流れた涙は、冷たさも感じられない寂しいものだった。

「あたしは…凜ちゃんを巻き込みたくなかった。陸と…どうせここに来るのなら、陸と一緒に良かった。わたし達はいつでも、どんな時でも一緒だったから…これからもって思ってたのに…」

涙を流している感覚が無い。

自分で自分に触れた感覚が無い。

美雨は自分の頬に手を添えた。

そんな美雨を見ていた凜は、美雨の手を強く握ることしか出来なかった。

「ご…めんなさい…美雨ちゃんも助けてあげたかったの……」

「誤らないで頂戴…。凜ちゃん…誤られたら、余計辛いんだもの」
天国の青。

それは、深く濃い色に染められた死者の世界。

天寿を迎えれば再び戻れる現実世界に、今は夢を持ちたい。

「神様は残酷で冷酷ね…。だって、あたしはあたしが死んだ日に
本当は…陸に思いを伝えようとしていたのに…。重要なことを、
生きている間に出来なかった。それは、あたしの心残り…」

「ここはどこなんだろう…?」

追いかけるように陸斗は扉の中に一歩足を踏み出していた。
青い世界。

「天国の青……」

本で読んだことのある、天国の表現。

本当にそのとうりだと思った。

「みいはどこ…?」

陸斗は過ぎる景色を目で追った。

どこも、俺の知っている街の風景だった。

「みいの家…俺の家だ」

隣り合った二つの家を見下ろしながら、ひっそりと願った。

「みいがここにいますように…」

不思議なほど優しい香りが漂っていた。

天国という異世界を見下ろして、ただ白紙と変わらない空白のペ
ージのような白く青い世界に魅入られていた。

罪

なつかしい匂い。

馴染んだ服。

ここには、思い出がたくさんありすぎる。

「凜ちゃん、ごめんね？家に寄ってっもらっちゃって……」

美雨は、霊界にある自分の家にいた。

何もかもがまったく同じ世界。

違うものは、いつも家で待っていてくれてた人がいないとこ。

「わたしのせいだから、いいの」

凜は涙ぐんだ美雨を見ながら、そう答えた。

「みい……」

陸斗は、美雨の家の玄関に立っていた。

凜と美雨の会話を聞いていたのだ。

陸斗は、美雨に声をかけていいのかを悩んでいた。

必死に凜が助けてくれたのに、俺がここに来てよかったのかと考
えたからだ。

・・・ガシヤツ・・・

「誰……？」

陸斗は、近くにあった鉢植えを落としてしまった。

「みい？俺……」

「陸……なんでいるのお？あたし、もう会えないと思ってたのに……」

美雨はただ泣いた。

それでも枯れない涙の雨は、とても美しかった。

綺麗で聡明。

「ごめん……俺……」

「違う……」

美雨は何かを否定した。

「違う……陸だけど、陸じゃない……」

「どういう意味だよ……」

「美雨ちゃんのいったとおり……」

凜も美雨と同じ意見だった。

陸斗だけど陸斗では無い。

意味のわからない言葉。

陸斗は軽く混乱していた。

「陸……陸はまだ死んでないよぉ……？何でここに来ちゃったの？駄目だよ、帰んなきゃ」

美雨は陸斗を真っ直ぐ見て言った。

「俺は死んだ……だからここにいる」

「違う違う違うツッ！違うよぉ〜っ！！だつて陸の瞳、緑色だよ？

いけないよ？駄目なんだよ。陸はこつちにいちや行けない」

陸斗は、一生懸命説明する美雨に泣いた。

「みい、ごめんな……助けてあげられなくてごめんな……？」

陸斗は泣いている美雨にそう誤ることしか出来なかった。

「美雨ちゃん……一回地上に戻らない？」

凜の提案に、美雨たちは笑顔を取り繕っていた。

これは俺の罪。

美雨の痛みは俺が受けなきゃいけないかったんだ。

陸斗はそう思いながら、美雨の横顔を見た。

懐かしく思う、美雨のあの笑顔。

今ここにある。

俺の罪のヒトツ。

思い

まだ泣いてる。

あたしの魂の無い体の前で、あたしに触れて誤って。

魂の無い体に誤るぐらいなら、ここにいるあたしを見て欲しい。

「何で見えないの…」

美雨は、お葬式という行事を見ていた。

凜と美雨の写真が二つ。

楽しそうに笑った、最高の笑顔。

真っ黒な服なんか着ちゃって、あたしにすぎるように声かけて。

母さんやみんなが声をかけてるのはあたしじゃないのに。

美雨は思いつきり泣いた。

自分の体の前で泣いてることが不思議でたまらない。

幽霊になったあたしを誰も見ることが出来ないのが許せない。

「許せない…っ」

「駄目美雨ちゃんっ！抑えて、心を沈めて」

美雨の強い言葉は、ただの人間には凶器になる。

急に咳き込み始めた友達を見て、自分の存在が逆につらくなる。

「みい…大丈夫か？」

「あたしが…大丈夫…？大丈夫じゃないよ、陸。辛い、辛すぎる

よ？陸も戻ったらあたしが見えなくなるでしょう？嫌だ、怖いのだ

！あたし怖いよ…」

陸斗は内心、すごく驚いていた。

ここまで混乱した美雨を見るのは初めてだったから。

違う、美雨から見ても、ここまで混乱したのは初めてだったのだ。

「綾瀬…いるんだろ？」

男子が一人、咳き込みながら美雨に近づいて来た。

「俺、見えるから…」

そう言っただけなのは、クラスメイトの藤岡敦ふじおかあつしだった。

美雨はそんな敦の言葉に、スツと落ち着きを取り戻した。それと同時に敦の咳き込みがなくなった。

「あたしが見えてる…？本当に…？」

「おうっ！っと、神野もいるし、って！なんで陸斗までいるんだ？」

だんだん大きくなっていく敦の声に、美雨は『駄目え〜』と大きな声で叫んでしまった。

・・・パリンツ・・・

美雨の叫び声は、お葬式に飾られた美雨と凜の写真にひびを入れた。

「えっ…？やだ、何で写真にひびが…？」

美雨のお母さんは、写真に手をかけた。

・・・ガシャンツ・・・

「キヤー…！痛い…何で…？」

美雨は乱れた心のまま、力を思いつきり振った。

美雨のお母さんは写真の割れたガラスで手を切り、上から降ってきた花瓶で頭から水をかぶった。

美雨は自分を抑えきれないままだった。

扉

気持ちが悪くコントロール出来ない。

揺れたまま…。

ずっと、ずっと。

「怖い…」

美雨はそう言っただけで怖えることしか出来なかった。

怯えるたびに、美雨の心は乱れ災害を生み出す。

「やだ、死にたくなかった…」

ガラスが割れ、写真が落ちる。

美雨は浮遊し続けた。

そのたびに割れるもの、咳き込む人。

泣き出す子供。

「みい…落ち着けっ！」

陸斗にそう言われて、美雨はやっと我に返った。

「り…陸うっ！怖いよあだし、怖いの…陸が現世に戻ったら、あたしのこと見えなくなっちゃうでしょ？声だつて聞こえなくなっちゃう。あたしの好きな人って話したの覚えてる…？あたしの好きな人、陸なんでもんっ！離れちゃうなんてやだっ！！陸う…あだし、みんなの前に立っても、誰にも気づかれたいんだよ？」

陸斗はそつと頷きながら、美雨の話聞いていた。

「寂しいよお…陸…それでも美雨は…ずっと陸のこと好きだからあッ！」

美雨の願いが叶うものならいいと思う。

でもその願いは陸斗や凜でも叶えてあげることが出来ない。

美雨の祈りは誰にも届かない。

神様にも叶えることは出来ない…。

「陸…神様っているのかなあ？あだし、命が欲しいよあ。それでもう一度現世に戻って、陸と一緒に学校行って、公園行って。」

それで一年たった2月14日には二人でまた……また、お祝いしよう？陸う、お誕生日おめでとあって、またお祝いしたいよぉ〜」
泣いて泣いて泣いて、それでも枯れない涙が驚くほど静かに流れる。

陸斗は話し続ける美雨をギュツと抱きしめて、頬にキスをした。

「陸……あたしがこんなこといつちやったから、あの……あれだけど……。陸はちゃんと戻らないと駄目だよ……？」

真っ赤に頬を火照らせて、美雨は照れながら言った。

「なんで……？」

「だって、陸斗は美雨が生きれなかったぶんまで、長生きしなきゃいけないんだよぉ〜っ！美雨はもう心残りは無いんだもん。陸斗に好きっていったから……あたしはもう戻らなきゃいけない……」

また一粒の雫が落ちた。

「何でそんな心残り残してたんだよ……もつと難しいのにしろよ……俺がもつとみいのそばにいたのに」

陸斗は、無理に精一杯笑って見せた。

「陸……そんなに笑わないでよぉ〜……あっ、陸。もう戻る時間だよ？病院に行く？」

美雨も精一杯笑った。

涙をぬぐって、笑って笑って……本当に最後の最高の笑顔を贈ろうとした。

「美雨ちゃん……病院の後、あたしたちは事故現場に行こうね？」

「……うんっ……」

その後は無言で歩いた。

本当に明るい笑顔を絶やさずに。

願いと祈りはそのまま、誰にも届かずに胸の中にある。

しまったまま、鍵をかけて誰にも触らせない。

心の奥にある、開かない門のさらに奥。

大きな扉が、
願いと祈りの鍵。

約束

泣いても泣いても結果だけはかわらない。

結局、好きな子を傍にいさせてあげることすら出来ない。

皮肉だな…。

どんなに好きでも、思うだけじゃ何も出来なかった。

自分自身も弱くもろかったから。

悲しませるだけが男なら、俺は男じゃなくていい。

「それでも、俺は美雨が好き」

出来れば、美雨にはもつと笑って欲しかった。

もつともつと、今以上に…。

壊れそうになるほど、今を楽しんで笑って、そして生きて欲しかった。

美雨は俺の…お嫁さんよめになるんだ。

いつの約束だっただろうか。

そう言えば、美雨とそんな約束もしてたような…。

・・・9年前・・・

5歳になったばかりの俺は、シロツメクサのたくさんある結婚式場にいた。

もちろん、その時も美雨と一緒に。

『結婚式なんだよねえ？ここ…』

『そうだよ…』

美雨はクローバーで何かを作りながら、陸斗に笑いかけていた。

陸斗はそんな美雨を見て、呟いていた。

『みいなら、僕のお嫁さんにするから…っ！』

その時も美雨はニツコリと笑顔を陸斗に向けていた。
真つ直ぐな瞳を俺に向けて。
『みいちゃんも陸のお嫁さんになるもん!』

嬉しかったし、愛おしかった。
今じゃそう思う。

でも、結婚の夢でさえ今は叶わない。

・・・ケホツ・・・

病院では、陸斗の意識が戻り始めていた。

陸斗の目に浮かぶ涙がそれを証明していた。

「先生っ！陸斗が、…陸斗の意識が、」

「そうみたいです。後は安静にしていれば大丈夫ですよ……」

途切れる会話、体には痛みが先走る。

生きてる証拠、証。

「美雨ちゃん…陸斗くん、戻ったみたいね……」

凜は美雨の顔を見ないでおいた。

泣いているのはわかっていたことだから。

「陸はあたしのぶんまで長生きしなきゃなんだもんツ　でもお、
あたしじゃない人が彼女だとちょっと気がなあ……」

未来を予想した美雨が、陸斗の未来の彼女を想い浮かべて笑った。

「美雨ちゃん、次はあたしたちが戻らないといけないよ……？」
泣いてると思っていた美雨は笑顔だった。

本当に幸せそうに笑って、何事も無かったかのように。

「そうだね、凜ちゃん…事故現場かあ、あんまり行きたくない場所だなあ」

美雨はそう言いながらも病院を後にした。

白き願い

たくさんはなたはの花束。

そこに飾られた写真。

コップにある差し水。

見ていて、何か痛々しかった。

「凜ちゃん……」

美雨は、そんな道路の横を見ながら凜の返事を待った。

「うん……何か嫌だなあ、一応うちらここにいるからね……」

「同感だよ……」

血に塗れていた道路は、普段道理に人々が行き交う。

会社へ向かう人や、デートの待ち合わせに向かう人。

いろんな人が、冬の寒い中コートを着込んで騒がしく歩いている。

……ドクンツ……

心臓が跳ねる。

黄色い光に包まれていく。

「ねえ、凜ちゃん……うちらこれで終わりなのかなあ……」

消えかかる体を見つめながら、質問の答えを待った。

「天国で幸せを追って暮らすんだよ？それに天寿が来れば、また

こつちの世界に生まれることが出来るから……」

美雨はコクンと頷き、ゆっくりと目を閉じた。

もうこの場所で事故が起きませんように……。

あたしたちみたいに、幸せな時間を無くす人がいませんように。

美雨はそう願いながら、ゆつくりと青い世界に戻った。
中学2年、14歳の『綾瀬美雨』。

天寿が来るのは86年後。

本当に短い命。

儂くもろく哀れな魂。

唯一の幸せを奪われた。

でも、美雨はそう思っていない。

美雨の生きがいが、現世で生きる陸斗だから…。

長く、長く。

あたしの命の代わりに、100年の時を過ごして…。

2月に降る雪。

それは美雨の涙の代わりに降った、幸せの初潮。

病院で眠る陸斗には、美雨の声が聞こえていた。

わずかな意識の隙間から、美雨の旅立ちの声が…。

美雨…俺、聞こえてるよ。

美雨の声…。

俺は長く生き続ける。

美雨に言われた通り、100歳になっても元気であるようにすっ
から。

雪は真っ白のまま…。

汚れずに舞い落ちる。

白く、輝いて水になる…。

誓い

「ありがとーございましたあ〜」

「ちよつと駄目よお？もう少し本当は安静にしないとなんだから…」

病院内には、陸斗の退院のあいさつが響いた。

陸斗の母は、異常なくらい明るくなった陸斗を見て驚いていた。

「あなた、まだ具合悪いんじゃない、」

「んなわけねえーよお…こんなに元気じゃんッ」

美雨の母も、陸斗の退院祝いに来ていた。

「陸斗くん…なんだかテンションが美雨に似てるわあ…あのコが男の子になっただけみたいないな…」

「んなことありませんよ…みいは、俺よりも明るくて可愛いツスから」

陸斗が苦笑いをしながら否定した。

陸斗に意識が戻ってから3ヶ月。

なぜか入院していて、ずっと美雨のお墓に行っていなかった。

今日は美雨に会いに行く日だから…。

陸斗はそう心の中で言っていた。

悲しんだままお墓参りに行ったら、美雨が泣く。

そう思ったのだ。

好きな子の笑顔が曇るのは嫌、そうずっと思いながら美雨と一緒にいたから。

美雨の最後の言葉、陸斗にだけ聞こえるように、美雨は消える瞬間に陸斗に一言だけ言葉を贈っていた。

『陸が泣いたら、美雨と一生会えないからね…陸のこと、ずっと』

好きだよ…』

陸は、最後に言われた言葉が嬉しかった。

「俺たち、両思いだったのになあ…」

好き。

美雨からちゃんと聞いた。

陸斗は、美雨と凜のお墓の前で手を合わせていた。

「みい、神野…ずっと見守っていてくれよ…?」

陸斗は胸元にかけてペンダントを開いた。

そこに写っていたのは、笑顔で陸斗にくつつく美雨と、ちょっと嫌そうで嬉しそうな陸斗の姿だった。

「まあ、みいも神野も…俺の中では生きてるからな…」

優しく微笑む陸斗の姿を、誰かがこっそりと見つめていた。

陸斗は気づかないまま…

いいや、気づかなくていい…。

美雨がそこにいるだけだから…。

俺は神に誓う。

もし神様っていうやつがいらないなら、俺は美雨に誓う。

100年後でも200年後でも、遠い未来にはもう一度…。
美雨に会うから…。

永遠の愛

・・・100年後・・・

「陸斗おじいちゃんッ」

「おお、美雨かい…？どうしたんじゃ…？」

100年後、陸斗は114歳になろうとしていた。

長すぎる人生。

孫も出来て、その子供も…。

名前は美雨…。

ありおか みづ
有岡美雨…。

「みいつ！学校遅刻するっ！早くしろよお〜」

「あ〜もう、すぐ行くっ！待っててよ？悠ちゃん」

もう一人の美雨を見て、陸斗は古い100年前を思い出していた。

「美雨…？早く学校に行くんじゃぞ…？悠斗くんが待ってるじゃ

ないかあ…」

「うんっ！おじいちゃん、明日ね美雨たちの誕生日なんだあ〜」

あの美雨と同じ瞳をした少女がいる。

目の前に…。

「そうか、悠斗くんもだからじゃなあ…？」

それも、あの時の美雨と同じ姿をした、100年前の美雨が時間を止めていたような…。

「じゃあ明日は、二人にプレゼントを買ってやらんなあ…？」

「うんっ おじいちゃん、ありがとお」

今の陸斗は、あの時の誓いを果たさせている。

美雨…。

もういいかな…。

美雨のところに行っても…。

「おじいちゃん…?」

陸斗は眠るようにして旅立った。

天国という、青く優しい世界に…。

「あつれえ〜?おじいちゃん眠っちゃったのかなあ?」

陸斗は、青い世界の中でもう一度消えた。

100が天寿。

14年長く生きた陸斗の生まれ変わりは14歳。

もつすでに、陸斗は現世にもう一度戻っていった。

綾瀬悠斗。

ここにいる美雨は、あの頃の僕等のようだった。

孫の子供ではあっても、同じ病院で同じ日に生まれた親友がいる。

僕等と同じように、生まれたときからの親友であって友達。

運命のような二人。

俺は孫の子供に期待しよう…。

俺たちと同じ誕生日に生まれた、俺たちと同じような立場を持つ

た子供に…。

僕等は見守ろう…。

未来を大切に…。

そして、一生幸せに…。

僕等のもう一度与えられた命を、繋ぐための糸を…。

どんなに生まれ変わっても、俺は君を、美雨を一生好きでいる自信があります…。

叶えてくれてありがとう。

そんなささいなお礼も、生まれ変わって記憶の無いあたしは陸に
そう言えない。

それでも、今でも…。

陸斗が好きです…。

《もう一度与えられた命…もう一度、両思いでいたいね……それ
で、あたしたちは結婚しようね》

《もう一度与えられた命…もう一度、両思いでいたい……それで、
おれたちは結婚しよう》

誰も気づかない。

この時、同じ日の同じ時間。

同じことを思い叶えようとしたことを…。

… キンコーンカンコーン …

「一生夫婦であることを誓いますか…?」

「誓います…」

「では、誓いのキスを…」

二人の唇がそつと触れ、甘い時間がすぐに終わった。
歓声が大きく響き、紙ふぶきが二人の上を舞う。

「それではここに、二人の婚約を認めます…」

運命って信じますか…？

時を越えても恋が出来てるあたしたちは、運命の赤い糸で結ばれていて。

そして今、100年前の誓いと約束が果たされている。

苗字みょうじが変わり、名前が変わっても。

二人の愛は永遠とわに続くから。

それが出来たたのは……。

綾瀬悠斗あやせ ゆうと

有岡陸斗ありおか りくと

有岡美雨ありおか みづ

綾瀬美雨あやせ みづ

いいえ…。

綾瀬悠斗と綾瀬美雨だけかもしれません。

記憶が無くても、生まれ変わったあたしたちの願いは…

叶いました。

時間ときを越えた永遠とわに等しい愛の形は、今ここにあります。

二人の声は、古い願いは。

遠い未来、今日この日。

2月14日…。

運命と共に……。

「ずっと、大好きッ」

永遠の愛（後書き）

最終話になりました。

初めての小説だったので、デキが不十分だと思います。

そんなあたしの作品を最後まで読んでいただき、ありがとうございます。
ます。

これからも、あたしの作品でみなさんを感動させたり、笑わせたり
とがんばりますので、よろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5986h/>

大好きッ

2011年1月27日13時11分発行